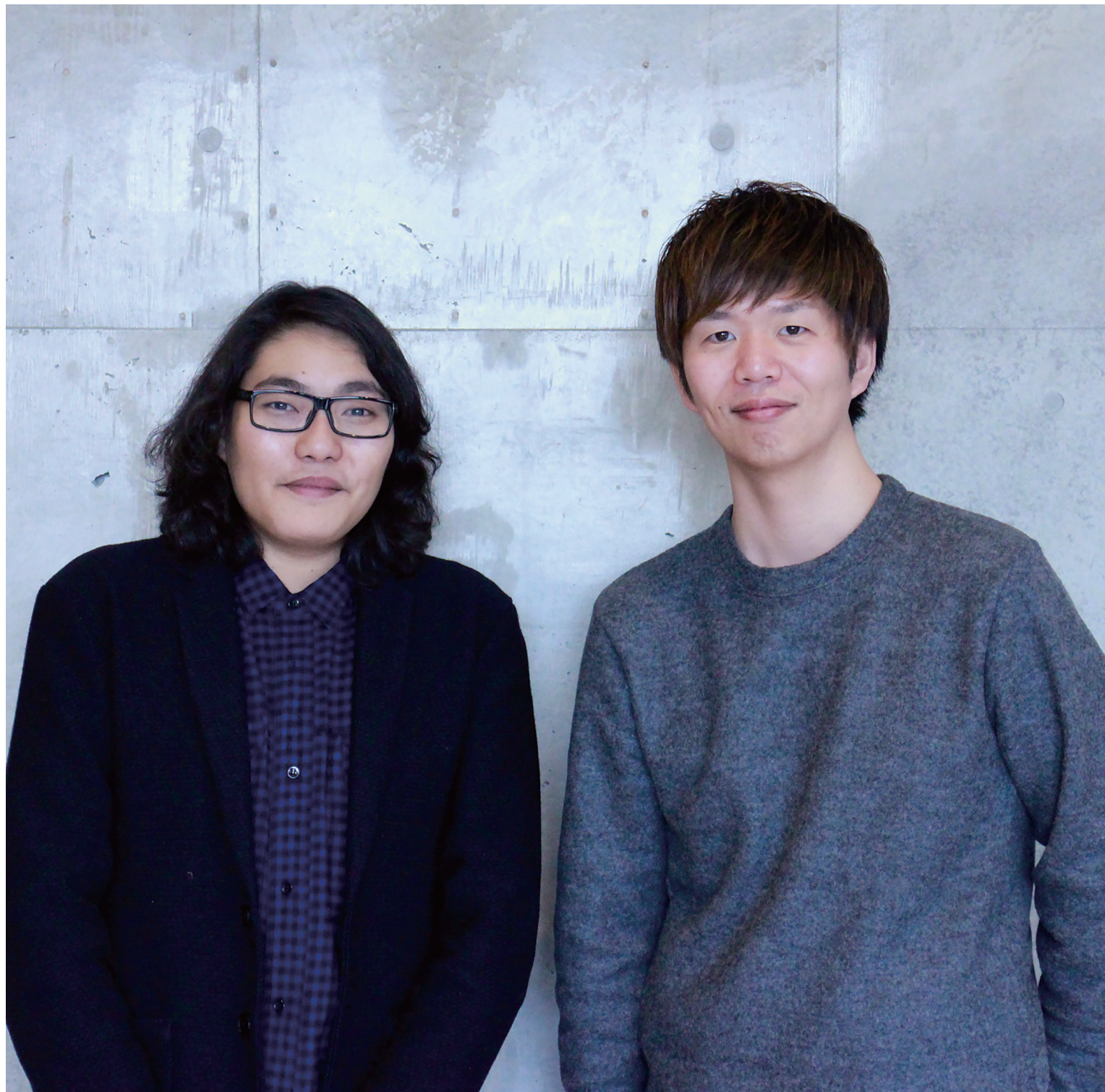


京都芸術劇場

Newsletter
shunjuza
studio21

vol.37
2017.4

ニュースレター



特集

木ノ下歌舞伎

『東海道四谷怪談—通し上演—』

— 2P-5P

ホワイエ

— 6P-7P

4～7月公演スケジュール

— 8P-11P

桂米團治 春秋座特別公演

— T・2P-T・5P



『東海道四谷怪談一通し上演』 2013 年初演時舞台写真 撮影：田中亜紀

木ノ下歌舞伎『東海道四谷怪談一通し上演』

2017年5月21日(日) 11:00

会場：春秋座

作：鶴屋南北

監修・補綴：木ノ下裕一

演出：杉原邦生

出演：亀島一徳 黒岩三佳 箱田暁史

土居志央梨 田中佑弥

島田曜蔵 中川晴樹 小沢道成 緑川史絵

西田夏奈子 松田弘子 岡野康弘 森田真和

後藤剛範 荻野祐輔 緒方壮哉 鈴木正也

猪股俊明 小田 豊 蘭 妖子

●公演情報の詳細はスケジュール一覧〈P.10〉をご覧ください。

歴史的な文脈を踏まえた上で、現行の歌舞伎にとらわれず、新たな切り口から歌舞伎演目を上演する木ノ下歌舞伎。今回、春秋座で上演する『東海道四谷怪談一通し上演』は、木ノ下歌舞伎旗揚げ公演前のプレ公演として、当時京都造形芸術大学の学生だった主宰の木ノ下裕一さんと演出の杉原邦生さんが上演した演目*です。

結成から10年目。まさに木ノ下歌舞伎生みの作品を持って古巣に戻ってくる2人は今、どのような気持ちなのでしょうか。お話を伺いました。

*2006年に旗揚げ公演として『yotsuya-kaidan』=『東海道四谷怪談』より三幕目（俗に髪梳きの場）を上演。

すべては四谷怪談から始まった！

木ノ下歌舞伎の原点にして最新形

埃立ちこめる世界で、あぶれ者たちの“生”がいま蠢めき出す

木ノ下歌舞伎を10年間やってきて

杉原 自分で言うのもなんですが、木ノ下歌舞伎って日本の古典を見直すきっかけをくれる、すごく貴重な存在だと思うんです。あの本を読み返してみようかな、歌舞伎や文楽をまた観に行こうかなと思える。

それは自分の国の芸術を、大きく言うとな自分が日本人であることを再認識するというか。「日本の古典って意外と興奮するわ!」「あー、和楽器カッコイイ!」って気づかせてくれる団体だと思うんです。

木ノ下 うれしいな。でも、旗揚げの時から、今のような形を考えていたわけではないんですよ。元々は、「自分が観たい歌舞伎新演出の舞台を作りたい」という欲望だけでしたもん。それは今でも変わらなくて、自分が観たい舞台を作っていますし、毎回、出来上がった舞台を観て、そう思います。

ただ当時、唯一、決まっていたのは既存の歌舞伎台本を上演するってこと。だから木ノ下歌舞伎にとって邦生さんの存在は大きいんですよ。2010年に『勸進帳』をやった時、初めて木ノ下歌舞伎のルールに、「歌舞伎の言葉を現代口語に崩す」と「完コピ（俳優が歌舞伎版の映像を見て、そのせりふ回しや所作などの演技様式を完全コピーするという稽古方法）をする」の2つが入ったんです。それまで僕は「歌舞伎の言葉を完全

に残す派」で、その上で「現代劇の演技体でやる派」だったんです。ですが、そうすると結構マニアックな作品になりがちで……、それだけやっていても広がっていかない。広げるためには、現代のお客さんにとってわかり良い口語訳のセリフも、歌舞伎の演技体を批評的に取り込むことも必要と、邦生さんに教えてもらったと思っています。そこから、かなり古典を見直すような、

杉原 批評性とエンターテインメント性を兼ね備えた上で、ただアカデミックでもなく、ただ楽しく面白くというわけでもなく、

木ノ下 「古典へ誘える団体になっていくのだ!」という、今のようなスタイルになってきたわけです。

そもそもの四谷怪談

木ノ下 木ノ下歌舞伎を立ち上げる前に、試演会的なリーディング公演をしようと思って、邦生さんに演出のお願いに行っただけですよ。そして「“四谷怪談”ならしたいけれどね」って、ぼそっと言うんですね。それで改めて演目を読んだり調べたりしてみて、「あ、これはいけるかも!」って思ったんですよ。

杉原 どの辺で思ったの？

木ノ下 打算的な理由(笑)。まず“四谷怪談”は歌舞伎俳優が一番読みづらいセリフっていわれているんですが、セリフが現代語に近くて「なるほど、確かにな」って思ったんです。



でも、だったら歌舞伎の演技体を持っていない現代劇の俳優でもいいけるかもとか、歌舞伎にかぎらず現代演劇でも何度も上演されているので演出の参照例も多い、とかですね。

杉原 僕は蜷川幸雄さん演出の『四谷怪談』（2002年）をシアターコクーンで観たことがあって。これが当時の僕には衝撃的だった。人力で動く回り舞台の上で、江戸時代の民衆が東京スカパラダイスオーケストラの音楽に乗って踊ってるっていうオープニングで。「かっこいい！俺もいつかこういうのをやる!」って。ある作品と運命的な出会いをした時「いつかやろう」とか「いつかやりたいな」って思うんじゃないかって、「いつか絶対にやる!」って直感的に思うんだよね。確信みたいな。『四谷怪談』もそう思った作品の1つだった。だから、言われた時、真っ



先に浮かんできたんだよね。

その頃、僕は演出を始めて3年目で、大学内とかその周辺の演劇界では前衛的なパフォーマンス系の作品が流行っていて。僕もその流れにのっかってそういうことをやっていたんだけど、その限界を感じていた。これだと広がっていかないな〜って。

木ノ下 なるほどね。

杉 原 そんな思いを抱えていた大学院1回生の時（2005年）、ラスベガスに行ける機会があって、現地でシルク・ドゥ・ソレイユのショーを観た時、「これだ！」って思った。表現は前衛的なのにサービス精神があふれていて、お客さんも毎ステージ2000人とか来るわけよ。自分でも観ていて、興奮するし、感動するし。エンターテインメントってこういうことだなって思った。ハッと目が覚めた感じ。その体験を経て作った初めての作品が『yotsuya-kaidan』（2006年）で、木ノ下歌舞伎って、そういうことができるかもしれないっていう手ごたえがあった。それに日本の古典作品を現代演劇化することの面白さと可能性、同時に木ノ下歌舞伎が目指していることの面白さと可能性を感じたんだよね。だから『yotsuya-kaidan』の公演が終わった瞬間に「僕も入れて！」ってお願いして、メンバーに入れても

らったのです。

木ノ下 あれは、僕にとって初めての作品だったから、邦生さんに迷惑をたくさんおかけしちゃったな…と思っていたら、スタッフが来て「邦生さんが入りたいって言うんですけれど」って言うんですよ（笑）。もう「え！マジでー」って。それで「えー入ってもらおう、入ってもらおう！」って。

でも、本当に面白かったんですよ。自分のイメージしている“四谷怪談”とは全く違ったけれど、それが、爽快だったんですよね。よく壊してくれるな、って。

今回の『東海道四谷怪談一通し上演』は？

杉 原 5幕11場という長大作の幕をひとつもカットすることなく、6時間に凝縮して全編みせるということは2013年の初演と変わらないですね。ストーリーを知っている人も「あ、こういう話だったんだ」と発見があると思うし、もちろん知らなくても絶対に楽しめると思います。

木ノ下 通し上演の初演の年って、東日本大震災の二年後で、しかも政権交代が行われた衆議院選もあったりして。世の中全体が、議論することを避けて、善悪の感覚だけで動いていくような感じがあったんです。原発事故が起こったから原発反対！民主党がダメなら自民党！みたいな……その極端さってすごく危険だなと思っていました。

だから“四谷怪談”が作りやすかった気がします。

杉 原 分かる、分かる。単純に体制や世の中の流れに対するアンチっていう構造が見せやすかった。でも今の方が、もっと“四谷怪談”の世界に近いよね。絶対と思っていたものが絶対ではなくなったり、明日のことすら分からなかったり、いろんなことに対して指針の無さを感じる。

だから観ていて、もっとヒリヒリするんじゃないかなと。

木ノ下 初演でもそうでしたが、今回はさらに主役級の登場人物だけでなく、登場人物全員が悲しく見えてくる作品になると思います。

何が「悪い」ことで、何が「良い」ことかは原作の中では定義されていなくて、その時この人はそれが正義だと思っていたけれど、こっちから見ると違っている。という、良い、悪いの判断基準が置かれた環境で変わっていく。例えば単に伊右衛門に「悪い奴」とレッテルを貼れない。原作はけっして勧善懲悪ではないんです。それを丁寧に拾おうと思います。それに最近、邦生さんの作風が、それぞれの個性や置かれている状態、環境によって異なる「人の心の痛み」みたいなものを繊細かつ濃密に描いておられるなど感じていて。その辺が今回、さらに表現されるのではないかなと思っています。

杉 原 あとね、去年は『勸進帳』を春秋座でも上演したけど、あの作品で「あ、これは出来たな」と思えたのは、描かれている時代も設定も昔の話だけれど、観ている側が「あ、現代の話かもしれない」って、時代を行き来できる幅の広さ。その自由度をグッと上げられた感じがした。無理やり引き寄せたり離したりするわけではなく、お客さんが自由に時代を回遊しながら観られる感じができたんじゃないかなと思うんだよね。

木ノ下 それが今回の通し上演でもできたら面白いですよ。

杉 原 それしたい！ そういう観客側の感覚について、もっと突っ込んで作っていききたいね。

あらすじ

元禄時代に起きたとされる事件を基に創作された、歌舞伎でもお馴染みの怪談話。

隆盛の高野家に刃向かったことで、お家断絶となっていた塩治家。塩治家の浪人である民谷伊右衛門は、素行の悪さゆえ、妻・お岩を実家に引き取られてしまっている。策を講じて、お岩を取り返すことに成功するも、子を産んだお岩は産後の肥立ちが悪く苦しんでいた。一方、隣家に住む高野家家臣・伊藤喜兵衛の孫・お梅が伊右衛門を慕っており、孫娘の想いを遂げさせたい喜兵衛は、親切に見せかけて、お岩に毒薬を渡す。薬を飲むと、みるみるお岩の面相が醜く変わり、高野家への仕官の誘いもかかっていた伊右衛門は、お岩を捨てようとするのであった。それを知ったお岩が恨みを残して死んでいく「元の伊右衛門浪宅の場」は有名だ。『仮名手本忠臣蔵』の世界を背景に、市井の人々が生き抜く姿を虚実織り交ぜながら描いた鶴屋南北の代表作。

木ノ下裕一 Kinoshita Yuichi

木ノ下歌舞伎主宰

1985年生まれ。京都造形芸術大学（映像・舞台芸術学科）で現代の舞台芸術を学び、2006年に木ノ下歌舞伎を旗揚げ。作品の補綴・監修という立場をとりつつ、様々な演出家とタッグを組みながら創作するスタイルをとっている。2015年に再演した『三人吉三』にて読売演劇大賞2015年上半期作品賞にノミネートされる。2016年に上演した『勸進帳』の成果に対して、平成28年度文化庁芸術祭新人賞受賞。

平成29年度京都市芸術文化特別奨励者に認定。その他古典芸能に関する執筆、講座など多岐にわたって活動中。

杉原邦生 Sugihara Kunio

木ノ下歌舞伎企画員／KUNIO 主宰

演出家、舞台美術家。1982年生まれ。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科第2期卒業生。在籍中より、演出・舞台美術を中心に活動。2004年、自身が様々な作品を演出する場として、プロデュース公演カンパニー“KUNIO”を創設。木ノ下歌舞伎での演出作品として『三番叟』『黒塚』『三人吉三』『勸進帳』など9作。また、平成二十八年 歌舞伎座八月納涼歌舞伎『東海道中膝栗毛』（演出：市川猿之助）で構成を務めるなど活動の幅を広げている。



『東海道四谷怪談一通し上演』2013年初演時舞台写真 撮影：田中亜紀

「木ノ下歌舞伎」これまでの主な上演作品

- 京都×横浜プロジェクト2012
義経千本桜
- 黒塚
- 木ノ下歌舞伎ミュージアム
“SAMBASO”
～バババッとわかる三番叟～
- 東海道四谷怪談一通し上演—
- 三人吉三
- 心中天の網島
- 義経千本桜 一渡海屋・大物浦—
- 勸進帳
- 隅田川
- 娘道成寺
- 印は春秋座でも上演された作品



yotsuya-kaidan [2006]



四・谷・怪・談 [2006]



『義経千本桜』より「四の切」の場面 [2012]



木ノ下歌舞伎ミュージアム“SAMBASO”～バババッとわかる三番叟～ [2013]



三人吉三 [2014]



勸進帳 [2016]

相撲とダンス

おもむろにテレビをつけて、相撲を眺める。ということを繰り返していたら、仕切りの動作を見てどっちが勝つか、取り組みを見てどの力士が強くなっていくか、という予想がどんどん当たるようになったので、ますますじっくり相撲を眺めながら、各力士のトレーニング方法を考え、どんな振付をしようかなとイメージする始末。そんな10年の歳月を過ごし、積み重なる思いや想像力を周囲の人にポツリポツリともらしていると、昨年は相撲を題材にした創作機会が、ふたつあった。

ひとつは相撲を題材にしたコメディの演出、ふたつめは土俵入りを題材にした振付だった。そのことを振り返りながら、演じること、舞うことに相撲をかけあわせる。というのは改めて考えてみたらなんら違和感がない、と気づく。演じる相撲でコメディといえど大相撲巡業などで行われる初切^{しよつきり}があるし、土俵入りや弓取り式といった取組み前後の儀式は舞踊的だといえる。そして全国各地には相撲を題材にした祭りごとが

多く点在している。

その中で夏に埼玉市岩槻区で行われる神事、子供達だけで実演される「古式土俵入り」の練習を見学させてもらった。相撲を取らずに、土俵入りだけを行うこの神事は複数の掛け声と身振りによって構成され、四股を踏む前に両手をくるくる回したり、片足でケンケンと移動したりと大小の様々な魅力的な動きが詰まり、ついつい見ているだけで胸が踊り顔がほころぶ。

こういった神事や芸能を通して、今も昔も相撲に魅了された人々がたくさんいたのだと想像しながら今の相撲に思いをはせる。

番付があがると、顔つきと身体が面白いほどに変化する。土俵に上がり集中していく様子や力士ごとに異なるニュアンスを魅せる身振り。行司の軽やかな足のステップに、呼出しの小回りの効いた手首のスナップ。東西南北の配置、色彩、中央にて裸で勝負に挑む男の勇ましさとカッコよさ、奏でる、演じる、舞う、戦う、清める、祈る、捧げる。相撲の要素

を題材にすれば、なんでも作れる気がしてくる。



Photo: Yujiro Sagami

きたまり

ダンスアーティスト

2006年京都造形芸術大学 映像・舞台芸術学科卒業。ダンスカンパニーKIKIKIKIKI主宰。13年よりダンスシーンの活性化と舞台芸術の可能性の広がりを目指し「Dance Fanfare Kyoto」を立ち上げる。2017年8月までアトリエ劇研アソシエイトアーティスト。現在、マーラー全交響曲で踊るダンスシリーズを展開中。好角家。

※P.11「日本芸能史」も併せてご覧下さい。

CLIP

舞台芸術研究センター周辺で起こる、ホットな話題をお伝えします。

読売演劇大賞選考委員特別賞

第24回読売演劇大賞において、京都造形芸術大学 舞台芸術学科の客員教授を勤める三浦基さんが選考委員特別賞を、また主宰する劇団・地点の作品『ヘッダ・ガブラー』が優秀作品賞をダブル受賞しました。

三浦基さんは、舞台芸術研究センターが拠点となって進めている『舞台芸術の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点』事業の平成27年度公募研究プロジェクト「マヤコフスキー研究」の研究代表者でもあります。

平成28年度(第71回)文化庁芸術祭賞

優れた芸術活動を表彰する平成28年度(第71回)文化庁芸術祭賞において、京都造形芸術大学 舞台芸術学科卒業生の木ノ下裕一さん(大学院 芸術研究科博士課程修了)と、きたまりさん(映像・舞台芸術学科卒業)のお二人が選ばれました。

木ノ下さんは、木ノ下歌舞伎『勸進帳』にて演劇部門新人賞を、きたまりさんはKIKIKIKIKIKIの新作公演「夜の歌」Aプログラムで舞踊部門新人賞を受賞しました。

太鼓の可能性を拓く

鼓童公演「若い夏」が初演されたのは昨年の浅草。坂東玉三郎さんが芸術監督に就任して以来初めてメンバーが演出を手掛けたという意味で、「若い夏」は今後への試金石と言える公演。坂東玉三郎さんの薫陶を受けたメンバーが何を観せてくれるのかという観客の期待感と、試される演奏者達の緊張感が会場を満たしていた事が記憶に新しい。一年の時を経てこの公演がどう熟成しているのか今から待ち遠しい。

組太鼓がこの世に生まれて凡そ60年。鼓童は常にその先頭に立ち、道を切り拓いてきた。彼らがいなければ太鼓は今のようには存在していないという意味では、彼らが舞台芸能としての太鼓を規定してきた。草創期のほとぼしるエネルギーと革新性は時代の気分と相まって多くの人々を魅了し、太鼓は世界に広がっていった。余談になるが、今や海外にも数百の太鼓グループが活動し、トップレベルでは日本人のプロ奏者と比べても引けを取らないまでに成長している。

鼓童といえば大太鼓や鍛え上げられた肉体というイメージが一般的。しかし鼓童を他の太鼓グループと決定的に分けたのは、彼らと関わった文化人達の存在だと私は思う。初期には民俗学者の宮本常一さんや永六輔さんなど時代を代表する人々が鼓童を支え、野生的でありながら知性的な独自の世界観の形成に大きな影響を与えた。そして今、鼓童をさらなる成長に導こうとしているのが玉三郎さん。それまでとは大きく転換し、一つ一つの所作、音、演出の作り込みが格段に精緻になり、作品テーマについて考える楽しみを与えてくれるようになった。派手な演出などの容易な進化ではなく、より困難な地殻変動のように深化を進める道を選んでいる事に、この業界に関わる者として期待と畏敬の念を抱かずにはいられない。太鼓というシンプルで楽器の持つ可能性はまだまだ尽きそうにない。メーカーとして演奏者達の期待に応えるモノづくりに励みたい。



宮本芳彦

宮本卯之助商店 代表取締役社長

1975年東京浅草生まれ。大学卒業後、イギリスに留学。修士号を取得。帰国後、家業である御神輿や祭礼山車・民族芸能太鼓、能楽雅楽器、祭礼具の製造販売を行う株式会社 宮本卯之助商店に入社。2010年、代表取締役社長に就任。14年和太鼓スクール HIBIKUS YOKOHAMA 開設。米国子会社 MIYAMOTO UNOSUKE LLC / kaDON(カドン) 設立。

※ P.9 鼓童公演「若い夏」も併せてご覧ください。

BOOK

『舞台芸術』20号発売！

特集 〈2020年以後〉の舞台芸術

インタビュー 青柳正規氏に聞く「文化立国」という展望

座談会Ⅰ 〈二〇二〇年以後〉の創造環境

片山正夫×内野儀×長島確×相馬千秋

座談会Ⅱ 劇場テクノロジーの変容

服部基×堀内真人×杉山至×中屋敷法仁

座談会Ⅲ 「芸術系大学」が切り拓くもの 鷲田清一×建畠哲×やなぎみわ

伝統演劇はどこに向かっているのか 渡辺保×渡邊守章

特別企画 三代目市川猿之助の世界

ポール・クロードル『繻子の靴』全曲上演にあたって

渡邊守章（聞き手：根岸徹郎）

舞台芸術研究センター機関誌『舞台芸術』。毎号、特集を設け、古今東西のパフォーミング・アーツを今日の視点で切り取り、21世紀における舞台芸術の新たな可能性について考察する書籍です。



B5判 1500円（税別）

購入は各書店またはAmazonへ
お問合せ：舞台芸術研究センター

5月11日(木) 19:00
12日(金) 18:30

春秋座 特設客席

ヨーロッパ演劇界で異彩を放つ
人形と生身のパフォーマンスの共存

ジゼル・ヴィエンヌ

『腹話術師たち、口角泡を飛ばす』

構成・演出：ジゼル・ヴィエンヌ

作：デニス・クーパー（出演者との共作）

英語上演／日本語字幕

本音とタテマエがせめぎ合い、
会議はカオスへと沸騰する——。
人形を介し、人間のダークサイドをえぐる衝撃作を次々に発表。ヨーロッパ演劇界で異彩を放つジゼル・ヴィエンヌが、ドイツ屈指の人形劇団「パペットシアター・ハレ」とかつてない会話劇を生み出しました。驚愕のテクニックで命を吹き込まれた人形たちが、白昼夢へとさそいます。



Estelle Hanania

【整理番号付自由席・発売中】

一般 4000 円 友の会 3500 円 学生・ユース 2500 円
瓜生山学園生 2000 円

※一部刺激の強い表現があります（12歳以上推奨）。

5月春秋座現代演劇お得なセット券

木ノ下歌舞伎『東海道四谷怪談一通し上演』5月21日(日)とのお得なセット券です。2演目一般8000円のところ、7200円でご覧いただけます。ご予約は、京都芸術劇場チケットセンター、オンラインまで。

T-C OTS e+ ぴあ 生協

6月10日(土) 16:00

春秋座

世界が認めた超絶技巧！
三味線だけで魅せる、極上のステージ!!

吉田兄弟「三味線だけの世界」

北海道登別出身で共に5歳より三味線を始め、津軽三味線の全国大会で頭角を現した吉田兄弟。1999年にメジャーデビューし、アメリカ、ヨーロッパ、アジアなど世界各国で演奏。その実力は世界でも認められ、日本の伝統芸能の枠を超えたワールドワイドなアーティストとして活躍しています。三味線二丁だけで演奏する兄弟の類まれな感性と超絶技巧のテクニックは圧巻！いよいよ春秋座の舞台で渾身の演奏を披露します。



出演：吉田兄弟（吉田良一郎・吉田健一）

曲目：「風翔音（Fusion）」「百花繚乱」「Panorama」
「津軽じょんがら節」ほか

※変更する場合がございますので、あらかじめご了承ください。

【全席指定・発売中】

一般 5500 円 友の会 5000 円

学生＆ユース席 3000 円（座席範囲指定あり）

※未就学児童の入場はご遠慮下さい。

T-C OTS e+ ぴあ 生協 新聞 KBS

6月11日(日) 14:00

春秋座

映像で振り返る復活狂言『^{ひとりたびごじゅうさんづき}獨道中五十三驛』と
三代目猿之助クリエイションの現場

「猿翁アーカイブにみる 三代目市川猿之助の世界」 第二回フォーラム

三代目市川猿之助（二代目猿翁）さんから京都造形芸術大学に寄贈いただいた貴重な歌舞伎関係資料をもとに、三代目猿之助の軌跡をたどるフォーラムの2回目。第一部は、三代目が1981年に復活させた鶴屋南北原作『獨道中五十三驛』をテーマに、寄贈資料の中からデジタル化された映像を上映。第二部は、「クリエイションの現場」と題し、その創作過程をさぐります。

第一部

【映像で振り返る復活狂言『獨道中五十三驛』】

ゲスト：石川耕士（脚本家）

第二部

【三代目猿之助クリエイションの現場】

ゲスト：杵屋東成（長唄唄方）

杵屋勝祿（長唄三味線方）

聞き手：田口章子

（京都造形芸術大学教授）

入場料 無料（全席自由）

往復はがきにてお申込み下さい。



【申込方法】

下記をご参照いただき必要事項を全てご記入の上、往復葉書にてお申し込みください。

往信表面 〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116
京都造形芸術大学舞台芸術研究センター宛

往信裏面 ①代表者ご氏名（ふりがな）

②ご住所（郵便番号含む）

③お電話番号（日中の連絡が可能なもの）

④参加人数（2名まで）

※車椅子をご利用のお客様はその旨をお書きください。

返信表面 お客様のご住所、お名前をご記入ください

返信裏面 白紙

【申込〆切】

2017年6月2日(金) 必着

※先着順・定員 500 名

（定員に達し次第受け付けを終了いたします）

【返 信】

受付完了後、追ってご返信いたします。返信ハガキが入場証となり、当日の入場時にご提示いただきますので、必ずご持参ください。返信ハガキをお持ちでない場合、入場をお断りする事がございます。予めご了承くださいませ。

7月2日(日) 13:00

春秋座

鼓童と迎える熱い夏——。

鼓童「若い夏」

昨年創立 35 周年を迎えた鼓童が、原点に立ち返る新作『若い夏』を始動させました。往年の名曲と共に、素朴さの中にも力強く躍動感あふれる演奏で、郷愁を誘う日本の原風景を雄大かつ繊細に表現します。

2016 年に浅草公会堂で初演を迎えた本公演が 2017 年夏、演奏者と曲目を新たに、ワン・アース・ツアーとはひと味違う新しい風「若い夏」を全国に先駆けて春秋座より発進していきます。



出演：太鼓芸能集団 鼓童

山口幹文、齊藤栄一、前田剛史、草洋介、蓑輪真弥、安藤明子、三浦康暉、鶴見龍馬、渡辺健吾、三浦友恵、前田順康、吉田航大、山脇千栄

【全席指定・発売中】

一般 6000 円 友の会 5000 円 学生&ユース 3000 円

※未就学児童の入場はご遠慮下さい。

T-C OTS e+ ぴあ 生協 新聞 KBS

4 1日(土)～23日(日)

春秋座

都をどり in 春秋座

1日3回公演 ※4月10日(月)・17日(月)は休演
1回目 13:00 2回目 14:45 3回目 16:30

【全席指定・発売中】

茶券付特等観覧券 4600円 壱等観覧券 3500円

京都芸術劇場チケットセンターでのチケットのお取扱はございません。

【お問合せ】

祇園甲部歌舞会 tel.075-541-3391

【主催】公益社団法人京都市観光協会・祇園甲部歌舞会

4 15日(土) 15:00

京都造形芸術大学映像ホール
(人間館地下1階)

ジゼル・ヴィエンヌ演出作品映像上映+トーク

5月11、12日の『腹話術師たち、口角泡を飛ばす』公演に先立ち、ジゼル・ヴィエンヌの過去演出作品映像をダイジェストにご紹介します。

トーク出演：橋本裕介

(KYOTO EXPERIMENT / ロームシアター京都 プログラムディレクター)

【料 金】無 料 (要事前申込み)

T-C 劇場HP

4 16日(日) 18:30

春秋座 ホワイエ

木ノ下歌舞伎オープンラボ 第三回「古典のカラダ 現代のカラダ」

ゲスト：井上安寿子 (京舞井上流舞踊家)

ナビゲーター：木ノ下裕一 (木ノ下歌舞伎主宰)

【料 金】無 料 予約不要 (定員70名・当日先着順)

T-C 劇場HP

5 21日(日) 11:00

春秋座

木ノ下歌舞伎

特集▶P.2

『東海道四谷怪談 一通し上演』

【全席指定・発売中】

一般 4000円 友の会 3500円 学生&ユース 2500円

高校生以下 1500円 (前売・当日共)、他

当日券：一般、友の会、学生・ユースは 500円増し

※未就学児童の入場はご遠慮ください。

T-C OTS e+ ぴあ 生協

5 26日(金) 11:30

春秋座

国際日本文化研究センター創立 30 周年記念イベント

映画『ハッピーアワー』

上映 & 監督・主演女優トーク

【全席自由】無 料 (要事前申込み ※申込み多数の場合は抽選)

【お問合せ】

国際日本文化研究センター 研究協力課 国際事業係

tel.075-335-2078 fax.075-335-2092

E-mail. koenkai@nichibun.ac.jp

6 4日(日) 14:00

春秋座

桂 米團治 春秋座特別公演

特集▶P.T2

【全席指定・発売中】

一般 4500円 友の会 3500円

学生&ユース席 2000円 (座席範囲指定)

※未就学児童の入場はご遠慮ください。

T-C OTS e+ ぴあ 生協 新聞 KBS

チケットお問合せ先

京都芸術劇場チケットセンター

tel.075-791-8240

営業：平日 10:00-17:00・公演開催日

京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

京都芸術劇場 春秋座・studio21

606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116

tel.075-791-9207 fax.075-791-9438

E-mail. k-pac@kuad.kyoto-art.ac.jp

http://www.k-pac.org

京都芸術劇場

検索

京都芸術劇場友の会 会員募集中！

詳しくは http://k-pac.org/?page_id=33

T-C 京都芸術劇場チケットセンター OTS 劇場オンラインチケットストア

e+ イープラスー http://eplus.jp

ぴあ チケットぴあー http://t.pia.jp tel.0570-02-9999

生協 京都、滋賀各大学生協プレイガイド

新聞 京都新聞文化センター (京都新聞社 1F)

tel.075-256-0007 (窓口のみ 10-17時 ※土・日・祝除く)

KBS KBS 京都事業部

tel.075-431-8300 (電話のみ 10-17時 ※土・日・祝除く)

*記載のないものについての開場は開演 30 分前

*特に表記のない場合、前売と当日は同じ料金

*ユースは 25 歳以下対象 (一部公演を除く)

*学生・ユースは要身分証明書提示

カーテンコール

今号よりニュースレターが新しくなりました。表裏どちらから読んでよく、公演前に読むとより舞台が楽しくなる内容になっています！ ぜひご活用ください。〔S〕

6 17日(土) 14:00

春秋座

響き eye コンサート

【全席自由・5月1日(月) 10:00 発売】

一般 1300 円 小学生以下 700 円

友の会一般 1100 円 友の会小学生以下 500 円

3 歳児以下無料

※座席が必要な場合は小学生同様

【お問合せ・チケット取扱い】

京都造形芸術大学 和太鼓教育センター tel.075-791-9145

T-C

6 24日(土)・25日(日)

春秋座

午前の部 11:00 午後の部 14:30

第24回 京都五花街合同公演「都の賑い」

【全席指定・発売中】

特等席 1 万 3000 円 (1 階全席 & 2 階正面全席)

1 等席 8000 円 (2 階バルコニー席) 2 等席 6000 円 (2 階補助席)

京都芸術劇場チケットセンターでのチケットのお取り扱い、「特等席」のみとなります。

【チケットのお求め・お問合せ】

おおきに財団 tel.075-561-3901

T-C OTS その他各種プレイガイド

演じるシニア ワークショップ

60 歳以上の一般の方を対象にワークショップ参加者を募集（選考有）します。2017 年度は複数の講師によるワークショップシリーズに参加していただき、2018 年夏の春秋座での作品上演を目指します。

ワークショップ講師：杉原邦生、他

募集要項は 4 月中に HP など公開します。

2017 年度 日本芸能史

「相撲と芸能」「神仏と芸能・芸道」

毎回、第一線で活躍している専門家を講師にお迎えし、日本で受け継がれてきた多様な伝統芸能を実演を交えながら解説していただきます。学習意欲のある方なら、どなたでも受講いただけます。

前期 相撲と芸能

総論 諏訪春雄 [比較芸能史研究] 理論

一人角力 大山祇神社 (愛媛県) 実演

歌舞伎 (双蝶々曲輪日記) 田口章子 [歌舞伎研究] 理論

神事としての相撲 諏訪春雄 [比較芸能史研究] 理論

相撲甚句 日本相撲甚句会 実演

相撲の伝統 34 代 木村庄之助 [元・立行司] 理論

落語 (花筏) 桂米團治 [落語家] 実演

浮世絵 (相撲絵) 新藤茂 [浮世絵研究] 理論

狂言 (蚊相撲) 茂山良暢 [狂言師] 実演

相撲の世界 豪栄道豪太郎 [力士] (聞き手: 田口章子) 理論

浪曲 (阿武松縁之助) 京山幸枝司 [浪曲師]・岡本貞子 [曲師] 実演

常磐津 (関取千両轡) 常磐津都茂蔵・常磐津都史 [三味線演奏家] 実演

神相撲 熊谷房長 [八幡古表神社 禰宜 (福岡県)] 実演

壬生大念佛狂言 (餓鬼相撲) 壬生大念佛講 実演

スケジュールは劇場 HP をご覧ください。

【申し込み方法】

前期 (全 14 回) 4 月 10 日 (月) ~ 7 月 17 日 (月)

後期 (全 14 回) 9 月 25 日 (月) ~ 2018 年 1 月 22 日 (月)

毎回: 月曜日 16:30 ~ 17:50

受講料各期: 1 万 5 千円

会場: 春秋座 ※ 10 月 2 日の回のみ学内他会場で行います。

申込方法: まずは京都藝術学舎へお電話、または窓口にて受講予約をお願いします。

【お問合せ・資料請求先】

京都造形芸術大学 京都藝術学舎

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116 人間館中 2 階

tel.075-791-9124 fax.075-791-9021

受付: 月~土曜日/午前 10 時~午後 4 時

休日: 日曜日・祝日・入学試験実施日・年末・年始

アクセス

- JR・近鉄「京都」駅、京阪「三条」駅、阪急「河原町」駅から
京都市バス 5 系統「岩倉」行きに乗車、「上終町京都造形芸大前」下車
〔「京都」駅から約 50 分、「三条」・「河原町」駅から約 30 分〕
- 京都市営地下鉄「丸太町」・「北大路」駅 (北大路バスターミナル) から
京都市バス 204 系統循環「高野・銀閣寺」行きに乗車、
「上終町京都造形芸大前」下車 (約 15 分)
- 京阪電車「出町柳」駅から叡山電車に乗り換え、「茶山」駅下車、徒歩約 10 分
- タクシーご利用の場合、「京都」駅から約 30 分。地下鉄「今出川」駅から約 15 分
〔「京都」~「今出川」は地下鉄で約 10 分〕

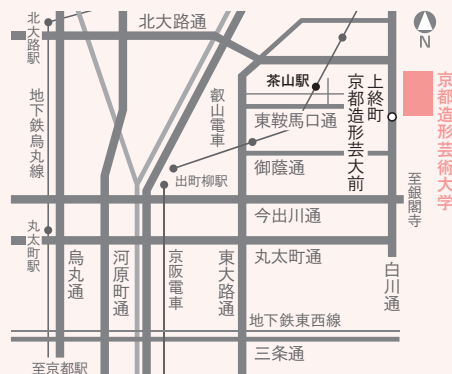
※所要時間はあくまで参考としての標準時間です。天候や交通事情により変わりますのでご注意ください。

※駐車場はございませんので、お車・バイクでのご来場はご注意ください。

発行日ー2017 年 4 月 1 日

発行/編集ー京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター
デザインー吉羽 一之 (Simple Hope Design Room)

京都芸術劇場ニュースレター vol.37





京都芸術劇場 ニュースレター

shunjuza
studio21
Newsletter

特集

木ノ下歌舞伎

『東海道四谷怪談—通し上演—』

2P
5P

桂米團治 春秋座特別公演
— T・2P
T・5P —

vol
.37
2017.4



桂米團治 春秋座特別公演

今年で4回目になる、春秋座恒例「桂米團治 春秋座特別公演」。1部は上方落語をきっちり口演する「落語会」。2部はお馴染みになった「おべらくご」の上演です。米團治さんが管弦楽と歌手とともにオペラをダイジェストして、分かりやすい落語に仕立て上げます。今回の「おべらくご」は、初回に好評を博した『フィガロの結婚』を一新し、さらにバージョンアップしてお届けします。まだ稽古に入る前、桂米團治さんと第1回目から出演してくださっている京都フィルハーモニー室内合奏団の理事長小林明さん、オペラ歌手の日紫喜恵美さんに集まっていた、大いに話っていただきました。

2017年6月4日(日) 14:00

会 場：春秋座

第一部 落語会 桂 佐ん吉 桂 米團治

第二部 おべらくご「フィガロの結婚」モーツァルト作曲
桂 米團治

演 奏：京都フィルハーモニー室内合奏団

ソリスト：日紫喜恵美（ソプラノ） 雑賀美可（ソプラノ）

西村薫（メゾソプラノ）

●公演情報の詳細はスケジュール一覧〈P.10〉をご覧ください。

小林 僕は、2回目が『ドン・ジョヴァンニ』で、3回目は『コシ・ファン・トゥッテ』だったので、本当は次は『魔笛』をやりたいと思ったんですよ。

米團治 いやいや(笑)、『魔笛』はそうとう作りこまないとい…。

小林 「フィガロ」の初演は米團治さんのアイディアで20分強ぐらいの落語にしたんですね。

日紫喜 本当にダイジェストですね。

小林 『ドン・ジョヴァンニ』の時には、もっと長くなって40分ぐらいですかね。そうやって自然と「おぺらくご」の中身が充実してきたと。その中でダイジェスト版の「フィガロ」を練り直すというのが今回のコンセプトですね。

米團治 そうですね。初演の時は曲の順番も変えてしまいましたし…。ところで今回、音楽の友社の『フィガロの結婚』のピアノスコアを買いに行ったら無いんですよ。絶版なんやって。なんですか？ あれには日本語訳が付いていて、日本語で歌える唯一の楽譜だったんですね。

日紫喜 今はどのホールでも原語で、イタリア語で歌いますからね。

米團治 あらゝ。でも、日本のお客さんは原語では分からないでしょ？

小林 字幕スーパ―を出しますからね。

米團治 字幕スーパ―ってどうですか？

小林 置き場所によりますかね。

日紫喜 メトロポリタンなんかは座席についてますよね。

米團治 へえ。実は文楽もそうなんですよ。

日紫喜 へえ。

米團治 日本語ですよ！ 日本語なのに字幕が出るんですよ、最近。僕、おかしいなと思うんです。字幕スーパ―だと太夫さんが語るより先にストーリーが進んでしましますからね。僕、舞台人として、嘶家としてね、あんまり好きじゃないんです。字幕。

日紫喜 師匠のやっていらっしゃる「おぺらくご」というのは、オペラの美味しいところだけをギュッと掴み出して、お客さんに日本語で投げて下さる。それは受け止める側にとって強いインパクトがあると思います。でも、もう一つオペラの歌詞の内容と声をそのまま届けるという意味で、日本語では声が乗りにくいという面があると思うんです。

米團治 歌詞が違いますからね。

日紫喜 はい。ですからイタリア語やドイツ語の響きをダイレクトに伝えるということでは、字幕も面白いかと思っています。

小林 全くオペラを観たことが無い人は、予備知識



撮影：演屋純一

を持っていない人が多いから、僕は必要やと思います。問題は訳し方かな。

米團治 予備知識が無いお客さんにも、ポンと提示して笑って、納得していただく、というのが落語だから、その手法を使って演じようというのが、「おぺらくご」の一番のコンセプトですね。

＊

小林 春秋座でやるときは基本、師匠は高座に座って、ほとんど全てを語ってもらいます。だから『芝居』にはしたくないと思っています。基本は落語で、何人かの歌手の方が出ます。というスタイルですね。そういう意味では僕は『ドン・ジョヴァンニ』が一番面白かったかなあ。舞台の装置も。高座がセリで下がっていつてね。あの演出は、誰も想像していませんでしたからね。

日紫喜 あれはやっていて興奮しましたね。いきなり下から赤いライトとスモークが出てきて、セリに落ちていくなんてね。でも、『コシ・ファン・トゥッテ』も良かったな。普通の演出だと全員主役みたいな作品ですが、師匠の演出では、一人の男の人に焦点が当てられていて、その爆発のしかたというか、切り口が新しくして斬新で、びっくりしました。結局、一番の主役はフェランドなんですね。

米團治 それはね、『狂言オペラ』(2016年2月全国)を僕が演出した時、フェランド役を茂山宗彦さんがやって、グリエルモ役を弟の逸平さんがやったんですよ。これは宗彦さんに感謝せなならんのやけれど、

お稽古の最中に宗彦さんの感情がどんどん尖がっていきくんですよ。「僕の台本をそういう風に読むか」って意外な方向に進めてくれたんです。そうしたら、ある日、「ああ……」って気がついて。「そういう心になっっていくんや。これは！」って。僕は普通に脚本を書いたけれど、彼の演じ方で、それを発見したんです。「そや、そこをもっと際立たせたらええ」って。それで「おべらくご」をあんな風にしました。

日紫喜 観たことがない切り口で、でも真に迫っている。胸を打たれるというか、私はそこに感動しました。

米團治 そのシーンができたとき、「ああ、良かった」って思っ。書いているうちに、ひょっとしたら脚本を書いたロレンツォ・ダ・ポンテもモーツァルトもそんなことを言いたかったんじゃないかなって。そんな風に脚本や曲の行間を読みながら、感じながら書いていました。

日紫喜 一方、『ドン・ジョヴァンニ』はドン・ジョヴァンニが主役だから、物語が彼の感情で進んでいきますね。

米團治 うん。でも僕の中では、やはり本当の主役は、騎士長の娘であるドンナ・アンナだと。ドンナ・アンナの復讐心……メラメラと燃える心を骨子にして話を進めていったら成立するような気がしたんです。そして実はドン・ジョヴァンニの対になるのが、従者のレポレツォではなくてドンナ・アンナなんやろなって思っんですよ。せやから、農民の娘であるツェルリーナとかツェルリーナの婚約者のマゼットの役は、わざと消したんです。

日紫喜 みたいな演出をされるので、今回は、「フィ

ガロ」をどう切ってくれるのか楽しみなんです。どこに照準を合わせて、どこをクローズアップしてくれるのかって。

小林 前は入門編みたいな感じでしたからね。もう一つ掘り下げるといっか。

米團治 うわー、ハードル上がったね(笑)。お二人は楽しみやろうけれど、脚本書くの苦しいなあ……(笑)。ほんま産みの苦しみやわ。でも、「フィガロ」の1週間前に僕、春秋座で『花役』^{はなやく}っていう相撲のネタをやるんですよ。今年の日本芸能史の前期のテーマが「相撲」だそうで、その講義でやるんです。(P.11「日本芸能史」をご参照ください。)どうしよ、そっちも勉強せなあかん。実はフィガロは相撲取りだったという話にしようかな。

日紫喜 じゃあ、スザンナは相撲部屋の女将ですね(笑)。

*

小林 師匠が「おべらくご」として、「フィガロ」を考えたのはいつ頃ですか。

米團治 そもそもは、ファミリーコンサートの司会をしていたんです。でも、ただ曲を紹介して演奏してもらってただけではもの足りない。お客様にもっと分かってもらいたいという気持ちが生じて、自分なりの企画をするようになったんです。そうしているうちにダイジェストで『フィガロの結婚』をやってくださいという企画がくるようになって、勉強していくと、どんどんオペラが分かってくる。ですが、「今回は声楽

家とピアニストと三人です」「今日はピアニストと二人です」なんてこともある……予算の関係で(笑)。そうして、だんだん減らしていったら、「あれ、一人でもできるやーん」って(笑)。それで、一人でやるための原稿を書いたんです。それが、「おべらくご」ができた一番最初でしょうね。

小林 なるほど。

米團治 ですから、逆に一旦、落語までそぎ落としてから、ここにアリアが欲しいな、デュエットが欲しいなと肉付けしていくわけです。まず落語にする。そして後から歌が入っていく。だからこそオペラではなく、「おべらくご」と言えるのでしょう。

小林 私たちとすうようになっ。てからも、最初は歌手の方はいなかったですよ。私たちオーケストラは高座の後ろに並んで演奏して。

米團治 学校公演で高校生の前でもやっ。たんです。「そんな、小林さん、高校生でっせ」「『フィガロの結婚』でっせ」って言ったんですよ。でも、「大丈夫です」って言うから。それで何の解説もなく、いきなりバーンってやっ。たらムッチャうけまして。

小林 その時、高座だけは崩さないで欲しいと言っ。たんですよ。歩き回らんといてっ。動かさず。に落語の形でやっ。て欲しいと。やっ。ぱり落語家さんですからね。いくら歌っ。ても構わな。いけれど基本はね。

米團治 落語の条件は着物を着ることと、座布団から離れないこと。それ以外は自由なんです。だからあんなにオーバーアクションされていた桂枝雀さんも、片足だけは、つま先だけは野球のベースみたいに座布団に乗っ。とると(笑)。

米團治落語の魅力

落語家は個性が大事だと思います。東西あわせて800人を超える落語家が居て、それぞれが一生懸命活動しております。お客様はそこから自分の好みの落語家を選んで会に足を運んでくださるのです。まして古典落語は、古くからある噺を受け継いで、同じ噺を皆がやりますから、「この人の噺が聴きたい」と思っていただかないといけません。

落語界の先輩がたは、皆それぞれ個性的です。ネタ数を増やして腕を磨き続ける人、古典落語に新たな演出を施したり、新たなギャグを加えたりする人、古い埋もれた噺を発掘し復活させる人、新作落語を作り続ける人、落語以外の活動で個性を発揮する人など、いろんなタイプの人が居ます。

我が師匠、五代目桂米團治の個性。それはやはりあの常人離れた「華」でしょう。

師匠が登場すると、舞台が一瞬で明るく華やぎます。照明の数が増えたのかと勘違いするほど。これは生まれ持った才能であり、舞台人にとって非常に重要な能力だと思います。師匠に入門して、いろんなことを教わりましたが、この「華」だけは稽古や努力で体得できるものではありません。私は生涯、師匠の「華」に憧れ続けるのでしょう。

桂 米輝



平成23年7月、米團治の二番弟子として入門。今、上方で最も期待される若手の一人。



撮影：濱屋純一

小林 そうなんです。基本は落語であって、時には歌を歌うかもしれないし、ピアノが流れるかもしれないけれど、落語が基本なんです。それがないと、むしろちゃくちやになりますからね。

春秋座だからその「おべらくん」

米團治 現在の京フィルが入り、オペラ歌手の方々が入った形の「おべらくん」を上演することになったきっかけは、春秋座さんからのラブコールですね。

小林 そして舞台装置が役割の何割かを占めていますよね。

米團治 そうですね、かなりの部分を。新しいものを作るにあたって、育ててくださる土壌が春秋座にはある。それが、すごくありがたいですね。

それに花道もセリもありますし。京フィルさんには、今回も回り舞台で演奏もしていただかないと。

小林 だんだん慣れてきて、もっと早く回してもいい

いよ、といったりして（笑）。

米團治 回ってないと、なんか頼んなくなってきたりしてね。『コシ・ファン・トゥッテ』の時は序曲で回さずに船出のシーンで回しましたね。

日紫喜 あれ、よかったですね！ 素晴らしく決まりましたね。

小林 本当に。あと春秋座さんの機構で使っていないのは宙乗りだけです。

米團治 じゃあ、次、使いましょか。『魔笛』の時に（笑）。

ぜひ、座談会のロングバージョンを劇場HPにてお読みください。